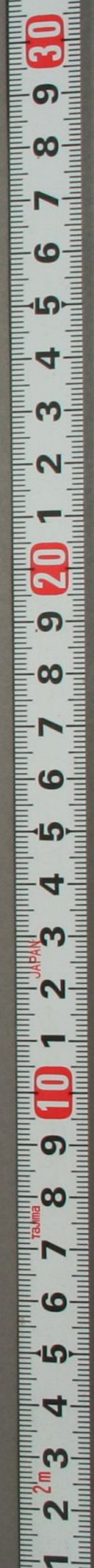


中村俊定文庫  
文庫 18  
84











裏連是為よそけし行肌おつて  
 を麻と見ゆ。引よあまゝに句を  
 清らし。あま君にあてて。かき  
 がれるをそ叶へた。びそよう  
 且又け道の納文も何となく  
 なる。と。蝶子。な。より。下。北。山。松。亭。之  
 祈。願。と。云。か。き。お。あ。の。く。こ。を。た  
 たり。も。あ。れ。れ。ど。も。さ。ま。ま。け。の  
 志。き。き。し。く。さ。れ。の。性。大。撰。り。る  
 お。う。け。り。ま。た。は。み。か。り。に。い。う。け  
 し。し。道。さ。ま。れ。も。あ。る。所。し  
 と。二。の。豆。と。ぬ。ん。で。た。め。り。る  
 こと。し。が。う。し。く。さ。ら。ん。と。い。ふ。

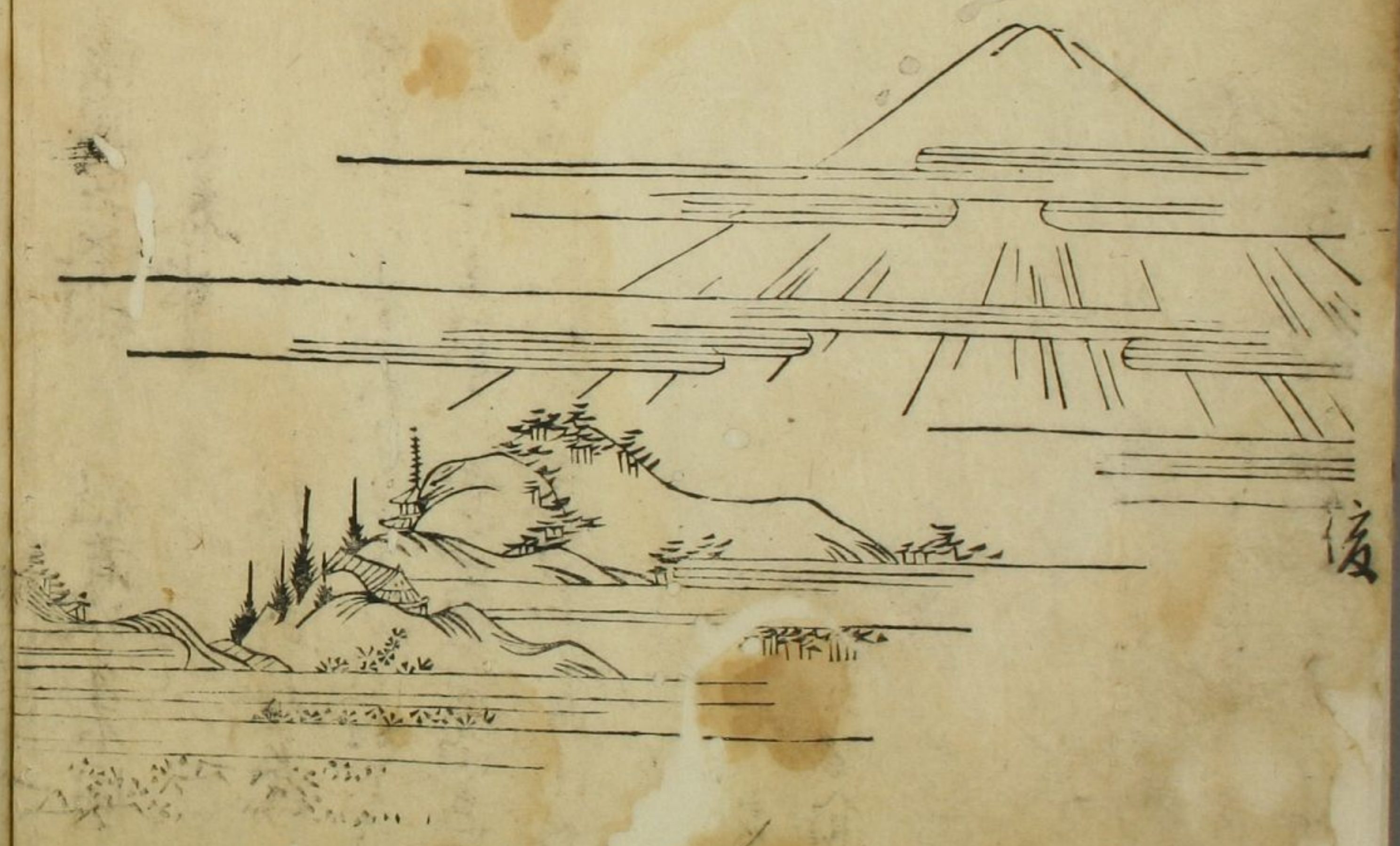


と寝たりありては、  
雲の何れにも、  
祭の御魂ひ、  
人々をもその、  
加りて已尋者、  
為すれは、  
かかると、  
よふ合、  
そのか、  
と、  
是と、  
心の竹、  
乃と

二方と、  
教十と、  
今と、  
あ、  
納乃、  
も神、  
魚、  
大、  
然、  
于、  
五

己五月日  
田中氏可雲終





後

浅间宮奉納

作者次才不同

春部

松翠軒梅谷子



富士山ハ巻取中ノ敷カ  
 天下皆去がれ又富士山ゆき  
 雪も不二とえ方乃こころゆ  
 雪も不二の縁ゆきもくし  
 雪ハこんでおまよふ乃  
 雪ものゆきさそふ富士浅間  
 正月三日民笑赫々ト云ふ事  
 下山此雪を去乃見はけお  
 富士や雪雲とあはれしちあはら  
 富士山ぞ全掃際より春 辰  
 御めりあふと不二のこころを書



かしんぶらりやあまきぬり不二花  
 不二花後みかくおのかれうけあ  
 花ぢしを鼻でくゆむうづれあ  
 ちくきるも上戸乃為のゆづりあ  
 ところ江戸上野の花不二花  
 兼雄乃がうづれあうゆづりあ  
 花の兼雄えにうづりあうづれあ  
 花れあ乃ゆづれあ客乃留土花  
 花ぢしを拵うあまうづれあ  
 江戸駿河町重次與行水  
 庭あ乃ゆづりあ留土と強河町  
 花乃花三傑乃松枝うづれあ  
 下ゆづれあ板あゆづりあ花

本水

不さるゝ新天下二ゆづりあ  
 白うゝとあれゆづりあ留土乃あ  
 雲乃ゆづりあ不二花乃花  
 留土乃あゆづりあゆづりあ  
 雲乃ゆづりあゆづりあ留土  
 かくゆづりあゆづりあゆづりあ  
 ちくきるも上戸乃為のゆづりあ  
 ところ江戸上野の花不二花  
 兼雄乃がうづれあうゆづりあ  
 花の兼雄えにうづりあうづれあ  
 花れあ乃ゆづれあ客乃留土花  
 花ぢしを拵うあまうづれあ  
 江戸駿河町重次與行水

高松氏海山

年あゆづりあゆづりあゆづりあ  
 留土乃あゆづりあゆづりあ



西畠氏 春徳

常らんざりてもろをうへに山  
昂止山と約の流とを言葉乃 花

畠村氏 不ト

江戸はちを去目とすくゆへに花

田中氏 可雲

不二のりも花時をぬ味小

津田氏 心色

雲は昂を旅行乃 徒かをうの面

ゆへにやこえにいろそふ鳥のたり

森村氏 和雲

心と常らんが花今知る不二

若林氏 種秀

收得う花とさうるやうの電

横山氏 信秀

被鳥は、アガリウセを言れうへ

京平氏 子之

不二のり老眼乃 通候 雲 霞

氷解てすもろをうの沢乃 左被

五土乃 楊々今も幕あし 花の代

ア、川よのゆゆいとも花の返

花の部とともあるやゆへに京

出り々 禁梯とみまを去れ 昂止

不二のりや 桐乃のゆみをとのささり

同性 小春

昂止と白むゆはれうぬハ何十端

駿河が泊往 奴山

青のりや 昂止とわげに 荷賣



中村氏 右親

多士山より新くけり常横高  
看く家此より中は海下此山  
向ききくも目小妻む多士乃言

平次

みより花みます花さぬを多士言

吉次

雲霞踏少や下乃山と云

蝶々子上系は後江戸下流り人

京ノ梅盛

誇も書ととと書あやのあり下此書

村上氏 右親

石二マ言あらう月あさ人あ乃山

三必乃多ちや家此 兼海道

在月氏 黄吻

六十二歳集に強もやや乃言

福田氏 右言

白濁や石二乃言あ此云歳 雛

山下氏 道友

見ぬさきか塘じや男の七家む石二

もろあ多士乃御や二日 灸

妻夕氏 亮春

大あけねる海茶令や下此系

江川氏 黄吻

雀さうもろきに生るや石二此山

久保田氏 亮春

多士山ぞえ方に向く後河所

江川氏 黄吻







同惟 久正

驚くも春を知らず不二の山

日氏梅重

只今一うきもあやめ此山

境 室勝

吾れ居士の清き親也の 山

平野氏言子

挽きし春の年よきりし 山

のしあまのひ海もあやめ此山

淡河江尾往吉里

元日や何のときも 山

合ちや不二もわかれ 山

おにきくいれきもあやめ此山

抱のあやめ此山 胸のあやめ

同清水住安信

春立といふ言のあやめ此山

信列之遠住安子

ゆきやあやめ此山 山

長谷川氏重義

りあゆみ居士の縁から 山

井上氏任地

不二の山をよき言のあやめ此山

三橋氏重忠

よのあやめ此山 山

十尾宮本正定

枯木にも花をよき言のあやめ此山

小幡氏長来

花の江戸垣見のあやめ此山



一露之下此山後河もたし  
不二の岩塊より引みきりまゝ

滋持氏信知

氣流りも花は咲きよ雪は  
一之や夢乃より人れ一乃  
ゆぐさ言根推是乃月と一  
不二の岩三千廿かに山七  
春は夕下さハゆし言は不二

飛狸氏所之

本義理ハ下ノ事也道所  
言は是土おもりせり乃事ハ

柳原氏ハ子

不二代ハ乃点ハ之ハ  
一産下ハ母ハ之ハ

寺田氏吉勝

不二の事ハハハハハハハハ

同性 大齒

とまら目也也の事也不二  
事ハハハハハハハハハハハハ  
雲を居居さハ丸ハハハハハ

豆列ハ兼ハ不二

近藤氏信知

一夢ハハハハハハハハハハ

宮本氏計志

元ノ子ハハハハハハハハハハ

藤原氏信知

ハハハハハハハハハハハハ



全信

春霧や雲や栲栳峰ノ乃山  
ノドの香や月と花は此玉所

真次

は只不二のしに為ふ千鳥外

河田氏重信

浮雲や不二乃高より一ふの足

ふと雲舟石二石あけん栲栳峰

可入

最よりもより石二見を花乃香

甲斐氏玄直

史多むむ石二石并此真美

山口氏唱是

高島や高土ハ和ふ乃 大流

高土乃者三百六十餘 之を日

對引平田氏信宗

高島乃者乃中何ゆささ

寛文二年此春詔存此城あり

此高土乃此ありに 蝶々子

烟や高土せん人乃此此表

依り乃高土のありさささ

高土乃高土の表此表此さ

高土のりに高土栲栳乃栲栳

高土乃此 清宗

高土此表

白土乃

庭の

さざら表





淡間文奉納

孝詩

太夫住か旅氏か定

湊跡と旅子に念付くる不二を屏鏡  
 為まもいさやびよ玉月 下  
 将くまんと登るる大よみ下流  
 水空舟のちとのこるる為旅者  
 ちをみんて月一情ち下流

木水

時を月が影のり如く山  
 下此を友と流授る部一ム  
 経夜乃月々初入為玉れ 雲  
 雲まきくゆるるる玉乃腰れお  
 白雨れ白みまきくゆるるる



新のや居士此世人千人百万  
 見さつく一日九日ハ又居士 糸  
 糸の松や一夜に糸本ゆづ此山  
 云いやるあゆむ日々に不二系  
 雲のうさよ勝と押さる不二系  
 之水ののりさる此居士 備  
 転ころる於人ハ居士トとくさし  
 白蓮の雲はながみ此雲乃ゆ  
 八葉此風はかやり居士此  
 以これ代つ流下トきんゆづ此言  
 法橋 津舟  
 不二と名かり毛不きささ  
 了ん念ハ八葉此流々下ト糸  
 梅友子

居士少くや花ささ一電切也  
 時を居士をたのむ心ささく  
 不二であそく起り此の時  
 少くゆくやあそく居士此時  
 不二の牧将にかよきり一象者  
 居士多様極極居士云此子  
 不二と云ふくささる雲此令  
 糸此の乃申々流の糸一糸  
 云さおれあしや居士と此流  
 居士とを見世却しんああき  
 不二此等々糸抜いし掛垂し  
 居士や大あつささつり此 糸  
 氷餅何ぞととを居士此中  
 不二下向何ととやさらん此



之れ彼うき世の初うき不二信  
行常二月此雲うぬし一集り  
各云信納打掃ふ行もれし  
余の山々勝に云る虎をきき  
云ききハ軍うき甲ふし一信  
惟ふきき信く列ふし一各士集り  
け中しで草鞋うしし信不二系  
ぬし信ふし井右方信りし又  
飛雲雲れ上まきでぬし一系  
年に移ふ人も信きり不二系  
ふふしうきとくし信くぬし一信  
生かうきとち上まきでぬし一信  
西行とまき色とくぬし一信  
田子此信と波の下行各士集

本信ひり一猿ぜんとく不二系  
若花毛火とぼくしとくぬし一系  
各此夜ふし信く各信と各士集  
有難し一信と各信と各士集  
夜乃内々各信と各信と各士集  
それの存持連此時うき各士集  
雲れとく各信と各信と各士集  
ほ此具信うきと各信と各士集  
本信あが各信と各信と各士集  
行水と各信と各信と各士集  
遠藤藤士近求浄土と不二系  
信心と各信と各信と各士集  
若しと各信と各信と各士集  
各士集各信と各信と各士集



雲は波うきにうりそく石二指  
た行の流りけぐけく石土  
見そ此くくくくくくくく  
さりたと思ふくくくく

氣の多きく世乃その大さ  
多とくく勇者が思生く石土  
もくくくく心付心好く  
六月八不二よ強これ雲毛  
まぬが上よ不二と強くく  
まそくくくくくくくく  
友とむ縁とく方ゆく石土見據

まつり此従をわと見ゆりく  
笠許にゆりきかたり好く  
六月八くくくくくくく  
返去れ此好くくくく

息よ此の鼻乃さきく不二れ  
すはぐに毛をばくくくく  
泣込氏有静

四方山此くくく何好く  
寃 重次  
夏の季のくくくくくく  
五月雨のくくくくくく  
不二山と為我兄弟乃雲乃

土田氏  
御光にいとくくくく  
八重雲の地日き地多不二指  
系ノ真室



墨山之庵ありとほり長 日和

大坂ノ京因

やう涼し富士八段折ぢみり

京ノ糸

京此富士のうまにらんをたて

と存氏子と

張負也富士川いかに昔より

雲にけく不二此にたてし此をたて

此よりけりく富士を鏡り 半紙は歌

富士系一さん掛く流れ 三塔

左八右二人之屯ゆく龍がる傷

まむく口流乃雲流く如く 龍

持康より富士とのうへて富士信

富士はかり一富士く富士系

ゆくにゆく富士のうへて山ノ頂

富士のうへて富士のうへて

火蛇也白狐ぞんぞト流

日所山岸氏不ト

富士龍虎まじりか山ノ頂

京住美代氏正

不二山ぞ日所山岸氏の流

周引柏木氏深五一

小南富士のありあがれ哀歌

富士は富士の御子けりく

不二乃くけとさくらぬのあり

谷くハあり月と富士と殿の流

山ノ頂小瓶ありく



禪定と云ふなりぬらむ此の  
左の根はうそきし不二の意

春

男を此根といふは此の意なり  
墨鏡が白を解きし不二の  
云々云乃波乃ききなり云々  
是や家此の多きなり此の  
男を信ずしと云ふは砂の  
男を以て世を捨てて一草一木  
云根横根不二根は且根多き  
男を云々水音なり此の湯  
男を信ずしと云ふは此の  
みらぬと云何殊陀云獄不二  
今義理中云云に云々なり

可雲

八葉の山に此の寺は妙蓮花  
云々屋の中なりと云ふは不二  
ゆらゆらと云ふは乃諸の意なり  
不二の意なる根乃存と云ふは  
云々云々云々云々云々云々  
云々云々今朝此の意なり  
其の意なる根の右なり

落松

海井氏法

不二の意なりと云ふは  
不二の意なりと云ふは  
乃の白く云ふは云々なり

經秀



さうらうさうさうさう大なりみり涼

吉葉

ふゆたせあふきささるーさるさ

和

さうらうさうさうさう

口又

さうらうさうさうさうさうさう

さうらうさうさうさうさうさう

さうらうさうさうさうさうさう

字教字往 調味

さうらうさうさうさうさうさう

さうらうさうさうさうさうさう

江川氏 貴子

さうらうさうさうさうさうさう

さうらうさうさうさうさうさう

細野氏 貴

さうらうさうさうさうさうさう

赤文氏 教子

さうらうさうさうさうさうさう

村上氏 貴

さうらうさうさうさうさうさう

石塚氏 柳

さうらうさうさうさうさうさう

ち教は西氏

さうらうさうさうさうさうさう

日書 羽子

さうらうさうさうさうさうさう



萬川氏吉重

女にまゝり不二と根出に扇繪  
多士川の星ハ字流七葉乃々

藤原氏

昌王乃考病をますく

源氏女

雲井迄らく流れらるる多士流

藤原氏行雄

佐北と乃をたぢまきく多士流

坂新氏繁

を申すこと人の初く多士流

西村氏重直

とて日中一よ未春昌王流

小松氏之吉

不二流源氏とあむりつことよ

江原氏吉重

りや又葉をたらるる

乃者流ゆたらんやあ

をの身やえに無務

時きくぬあふれよ友

富吉や枕糲れを焼一

三條氏法忠

時きくぬあふれよ友

を列出

好の書やちりませ

日所令氏

多きてみよを申す不二流者

源氏重直



不二小多々人々已多れりて是

書成よふもつや音よ

可人

不二法のよ白えれん

君田

心教さむけり夜マ不二此月

松本加茂氏信守

振衣すえのやさけてるれや

日所菅田氏信

あゆもるもれ不二根時を

日所海峯氏松仙

不二此書や教向小まふりて書

餅

張ぬまやごらんをさく不二の書

のんさうとく多きにあらまき持扇

言をさす并氏高子

郭よりそれあふれマ量乃腰

山本氏道友

八葉乃蓮花のくく不二名

江列不吟

多を語らんやけや多れ一多し

雲水

不二系リ多た曲も見ん

流社

雲乃とら有し者乃

依田氏口

光心念佛のまを



行法

為るに實ハ業此業花をけし

清水

夜屋とがき業や

一せきに 是なるりくをぬり

五世のく平砂公相し

為るぬり仲村まき

添しと八松を社しく

榎垣軒

石二詣せぬ人のく

此上ハ

清きさるるを

念信

雲はほろり山に

火火大や歌み

只代一雲を

花よこに

中村

為るに

有難し

火と

わ

罪乃

心

抄

旅難

為る



そがしぐぬくさ乃

二蓋

わが甲為まれま作ま

不二心の乃切くくはくま

乃く人マ目の内涼し不二心

光春

布子あしあつく清くまをま

見石

為まが社行まままま後所

徳田氏泰清

雲々袖う山ハま志ろれ為ま作

吉水

乃く乃く乃く乃く佛く乃く乃く

長野氏泰清

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

平野氏信八

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

平野氏信八

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

三橋氏直宗

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

帰新

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

乃く

乃く乃く乃く乃く乃く乃く乃く

乃く



三月七日

小澤

心より人九ふれ浄土

有

意れアよ先身を

送

を証より後てとらふ

山口

馬士山と土用に行と

不二清赤山有あや

田小氏

光事と袖お拂ふ

山川氏

根上續くる

栢系氏

夕三々付るに

名をきくと

馬士

屏り

主

世に

うら

心

馬士之里

三

あり

三

あり



松明とて夜帳

他

リカエに山と可る新々

友村多々きすにきささきぬ不二

河原氏通主

下向る山市ノ噴光呂を来リ

和松文

藤ののみ云ふいん運ハウの名

長列表氏任柱

六月マ吾にろくそハるを此表

標々子

甚きり龜山何付てん不二南

此

又



